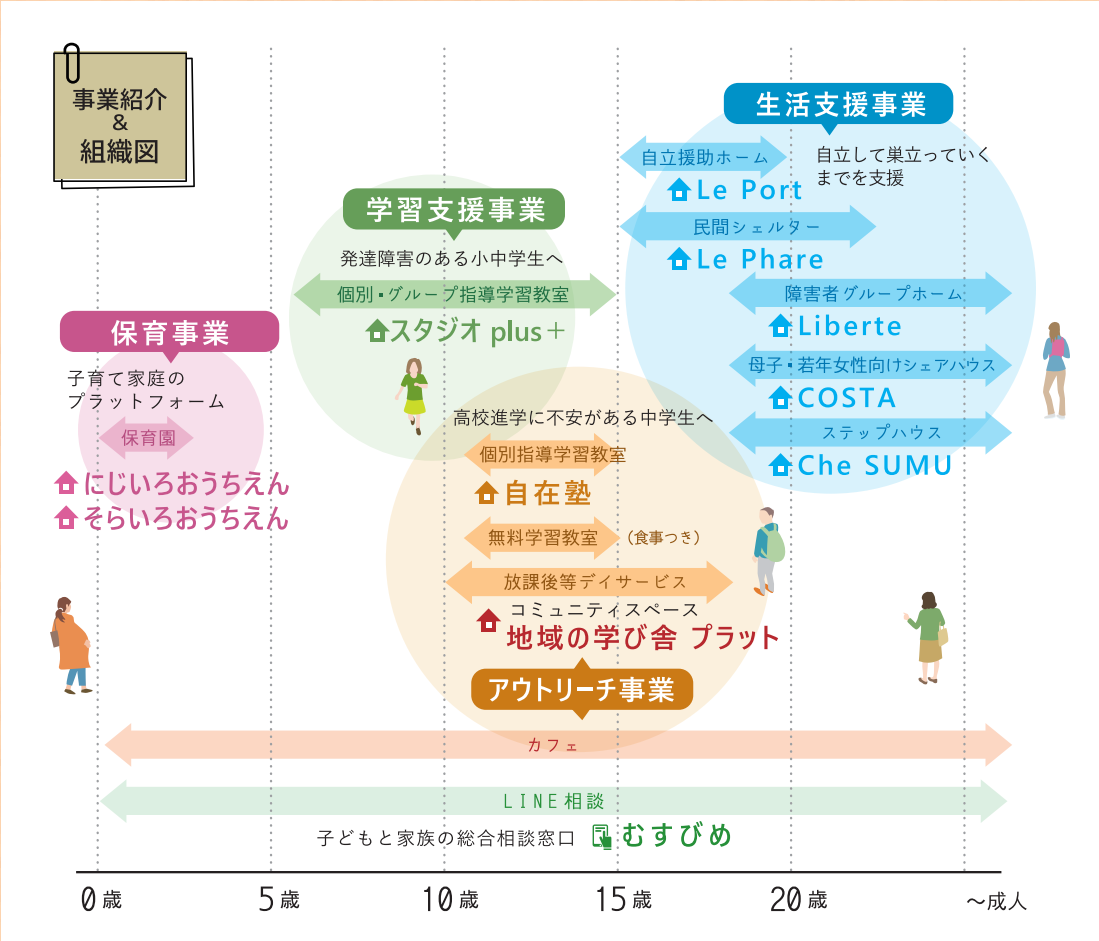
人とつながる、輪が広がる

特定非営利活動法人ダイバーシティ工房
年次報告書 2022

全ての家庭が安心して暮らせる社会の実現へ



Vision
ビジョン

目指す社会

すべての家庭が
安心して
暮らせる社会

Mission
ミッション

存在意義

子どもと家族の
成長に合わせた
暮らしやすい
環境を創る

Value
バリュー

価値

自ら違和感・
暮らしづらさを見つけて
行動します

代表メッセージ

2022年度はダイバーシティ工房設立から10年を迎え、次の10年を見据えたビジョンの実現に向けて歩き出しました。

そんな10周年は、私にとって「やめる一年」でした。

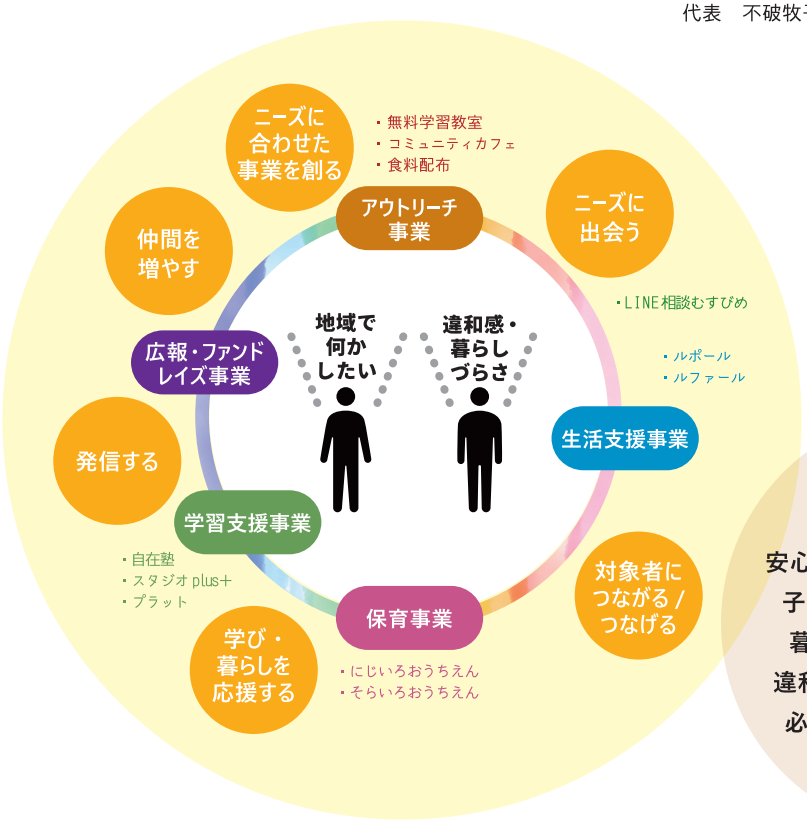
何をやめたかというと、「自分＝ダイバーシティ工房」と組織と自分を同一化することや「法人の代表だから」と役割にとらわれることです。私＝組織ではないなんて当たり前のことですが、自分で立ち上げ10年以上も代表として日々組織内のあらゆる意思決定に関わっているとそんな錯覚に陥ることがあります。

勝手に全ての責任を背負うことは組織の成長を妨げるということに数年前から気付いていました。そのため経営の責任を分散させ、この数年で育ててきた事業部ごとのマネージャー制度や、役職や在籍年数に関係なく対話や新しい取り組みが生まれる組織風土づくりに注力しました。システムコーチングやマネージャートレーニングといった人材育成、組織開発に投資をした2022年度でした。

「子どもと家族の成長に合わせた暮らしやすい環境を創る」のミッションにあるように、誰しも人生の中で変化や成長をしていきます。それは自分自身も組織も同じで、ダイバーシティ工房も代表である自分も変わり続けていく柔軟性が、組織としての強さに繋がっていくと考えています。

2023年度も引き続き、ビジョンの実現に向けて自分も組織も最大限の力を発揮できるよう、模索しながら進んでいきます。

NPO法人ダイバーシティ工房
代表　不破牧子



全ての家庭が
安心して暮らせる社会を目指して、
子どもと家族の成長に合わせた
暮らしやすい環境を創るため、
違和感・暮らしづらさを見つけて、
必要な事業を創出しています。

2022年度 ハイライト

数字で振り返るダイバーシティ工房

一人ひとりの学び方を見つける

学習支援事業

スタジオ plus＋

子どもたちが一人ひとりに合った学び方を見つけていくことを目指し、活動を行っています。子どもへの直接支援だけではなく、ご家族への支援も大切にしていくために、保護者交流会や進路説明会等の保護者向けイベントを実施しました。コロナ禍で中断されていた、保護者同士、保護者とスタッフの交流が実現しました。より多くのご家庭に支援を届けられるよう、卒業があることでの支援の循環を大事にしていきます。

スタジオ plus+ が考える支援からの卒業とは？ CHECK 記事はこちらから！

スタジオplus＋の支援からの卒業

30名

ひらがな読み書き教室

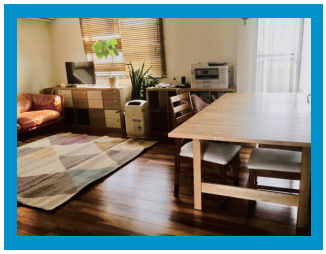
オンラインでのプログラムを本格的に開始し、九州、四国、近畿、東海など全国各地延べ 30 名に支援を届けることができました。また、子どもを取り巻く環境にもアプローチしていきたいという思いで、保護者・教員・支援者の方々を対象に、ひらがな読み書きに関するオンラインセミナーを開催。言語聴覚士の寺田奈々さんを講師にお迎えし、479 名の方にご参加いただきました。

ひらがな読み書き教室に通うことで不安が軽減された

95%

望む暮らしに向けて寄り添う

生活支援事業



女性向けシェルター・自立援助ホーム

若年女性向けシェルター・ルファールは開所から計 9 名（通所含む）が、就職や結婚など様々なライフステージを経て自立し、全利用者を送り出した後に一旦閉所となりました。シェルターの機能は、新しく開く拠点で受入れの体制を整える予定です。自立援助ホーム・ルポールでは、計 5 名の児童が生活を送りました。外部機関での就労体験や法人内で実施した職場体験で社会経験を積み、その経験を生かしたアルバイトを開始したり、進学希望者は、ホーム内のあらゆる資格（保育士・社福・教員等）保有者と進路について考える機会を持つなどしました。今後も支援の質を高め、一人ひとりに寄り添った支援を行っていきます。

シェルター・ルファールでの生活を経て新たな生活を始めた退所者数

9名

（2020 年の開設から通所を含む）

こども主体

保育事業

にじいろ・そらいろおうちえん

「こども主体」の保育の質を高めるために、外部講師による研修（保育観察・振り返り）を行い、こどもの姿について保育者同士が考え、対話する機会を持ちました。コロナ禍で停止していた保育参観を再開し、さらに「いつでも・何度でも」保護者のご都合、ご希望にあわせて参観できるかたちに変更しました。保護者交流会も対面開催を再開し、保護者、スタッフの対話がオンライン以上に活発に行われました。これからも「こども主体」の保育の質を高めながら、保護者のみなさんが困ったときに気軽に相談できる「子育て家庭のプラットフォーム」であり続けられるよう、保護者支援にも力を注いでいきます。

おうちえんに通うことで心配や不安なことが軽減された

97%

拠点で待っていても出会えない人たちとつながる

アウトリーチ事業

食料配布・おむすびプロジェクト

近隣の夜間定時制高校に通う子どもたちに食料を配布する本活動は、1月に会場を高校近隣のコンビニエンスストアの駐車場から学校内に移したことで出会える高校生数が大きく増加しました。同じく校内で行う居場所カフェの活動と合わせ、学校行事への出席者の増加などの変化に繋がりました。

食料配布を受け取った高校生 延べ 260名以上

配布食数 400食

食事つき無料学習教室

友達同士や学校の先生・関連機関の紹介などを介し、新しく21人の子どもが利用しました。2年ほど継続して通った中学3年生の子からは、「勉強も苦手だしカリカリした雰囲気も嫌だったから塾には行けなかったけど、ここは勉強しなくてもいい場所だったから通えた。大人と話すのが楽しかった」という言葉が。
当初は学習への苦手意識が強くありましたが、毎週通う中で少しずつ学習へ向かう時間が増え、学校の提出物が出せるようになったり自分で志望校を選べるようになったりと変化が見られたお子さんでした。

プラットでは自分の気持ちを話せる人がいる 92%

いつでも・誰でも

LINE相談事業

むすびめ

サービス開始から3周年を迎え、登録者数は前年度より900名以上増加し、相談件数も前年度の2倍以上となりました。相談内容の内訳としては、【子育て・家族・パートナーについてのこと】が最も多くこのカテゴリーでの相談割合も前年度より10%近く増加しました。
また、市川市からの委託を受けて、11月からは市内在住の女性を対象とした「市川市女性相談」を開始しました。

むすびめに相談することで、困りごとに対して必要な情報を手に入れることができている 60%

登録者数 2747名

相談件数 9815件

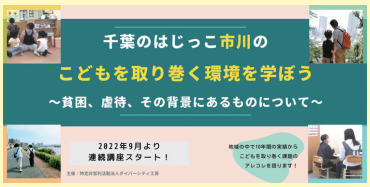
新たな試み

全国出張プロジェクト

LINE相談むすびめを利用する全国の相談者への情報提供・支援の連携に活かすことを目的に、全国各地で子ども若者支援に取り組まれている団体を訪問しました。直接訪れることで見えた地域性の違いや、支援方法だけではなくその背景にある支援への考え方、価値観なども学んだ出張プロジェクトとなりました。今後の市川市での地域づくりに還元していきます。

7つの道県・26の拠点への訪問レポート記事を公開中！

こちらから！ CHECK



法人設立10周年・連続講座の開催
「千葉のはじっこ市川のこどもを取り巻く環境を学ぼう」

地域で子どもを取り巻く課題に対する理解者を増やすことを目的に、ダイバーシティ工房が10年間の活動を通して見てきた課題構造や支援を得ることでの変化などについて報告しました。半分がディスカッション時間となる本講座に、延べ84名の方にご参加いただきました。

保育園で築くフラットな関係性

おうちえんは2017年の開園当時より、保育園に入りづらい自営業・パート・就活中のご家庭の優先的な受入れや、軽度の障害があったり、医療的ケアを必要とするお子さんも利用できるインクルーシブ保育を実践してきました。根本には、**それぞれの家庭が望む多様な働き方や暮らし方に寄り添い、子育てのパートナーでありたい**という思いがあります。

こどもとも保護者とも、フラットな関係性を築き、保育園というコミュニティがふと相談できる場所でいられるように。そんな関係性構築の一つの場が、保護者交流会です。
2022年度にそらいろおうちえんを卒園した3名の方と、ともに辿ってきた卒園までの過程を振り返りました。

自分の名前で呼ばれるのが最初はちょっと恥ずかしかった

なおみさん　保護者交流会に初めて参加したとき、質問項目に「よく行くお薦めのお店は？」とあったのを印象深く覚えています。
上の子が他の園に通っていたときは、保護者同士が交流する場もなかったので、最初はちょっとびっくりしました。

ともこさん　こどものことではなく自分について聞かれることが子育ての中ではあまりなく、最初は何を言おうかわからなかったですよね。

よしみさん　でも初回の保護者交流会で、ともこさんが紙に描いたキャラクターの絵がものすごく上手で、「絵がうまい方なんだ、すごい！」と思いました。

なおみさん　よしみさんご家族が野球ファンというお話をしていたのも覚えてます。そうやって少しずつ、お互いのことを知っていきましたよね。

ともこさん　先生のことを下の名前で「〇〇さん」と呼ぶのも、少し驚きました。普段から保護者も下の名前にさん付けで呼ばれるので、最初はちょっと恥ずかしかった。
でも慣れると、関係性自体も相手のことを「先生」と思わずに色々話せるようになるんですよね。

よしみさん　この関係性、ずっと不思議だなと思ってたんです。先生だけど先生じゃない。スタッフのことを名前で呼ぶことに全然抵抗がないんです。友達とも違うけど、先生ではない、それがすごく心地よかった。

ともこさん　保護者交流会が終わったときに思うのは、保護者もスタッフもこの人たちに会えてよかったということ。色んな刺激をもらっていました。

子育て中のスタッフと情報交換も

なおみさん　コロナ禍では保護者交流会がオンラインになりましたが、そのときにスタッフも自分のお子さんや子育てについて話してくれ、身近に感じました。

よしみさん　地域に住んでいるスタッフも多く、卒園後の通い先の情報やそのとき自分が気になっていることを、「保育園の先生」としてではなく同じ保護者の立場で話している感覚もありました。

ともこさん　お迎えのとき、その日のこどもの様子が詳しく伝えられるのですが、自分のこどもがしっかり見られているという安心感も強かったです。

なおみさん　自分が家庭で心配していることについて、「〇〇ちゃん、今日はこうでしたよ」と、こどもと大人一対一の関わりの中でこそ見える話を聞くと、「あぁ、大丈夫なんだ」と思えることもありました。小規模園ならではのやりとりだなと思います。

保護者同士も相談できる関係性でいられる

なおみさん　お二人は、入園先を探していた最初の段階から、小規模保育園（0〜2歳児を対象に定員を6〜19名以下までとする少人数制の保育園）でもいいと思っていましたか？

よしみさん　実は、家からより近い他の園が第一希望でした。でも、入れなくて。職場復帰したかったので焦りました。相談先もわからないままとにかく探し、そらいろは見学もせず入りました。結果的にここの雰囲気がとても好きになりましたが、入園まではとにかく必死。

ともこさん　私もそんな感じです。待機児童が何十人といた頃で、保育園に入れないかもという状況に対してとにかく必死でした。

なおみさん　私自身は小規模園もいいなという思いがあったのですが、中にはお二人のように積極的に希望していたわけではないけどそこしか入れず…という人も、きっといると思うんです。
だから、おうちえんがやっている保護者交流会などの機会が、保護者が知りたい情報に触れられたり、相談できる関係性が作れる場所であり続けてほしいなと思っています。

こどももスタッフも自分らしくいられる保育園

2022 年 4 月におうちえんに入職したみどりさんとゆうなさん。
2 人は前職が大規模保育園でした。
小規模保育園であるおうちえんに入職して、
気づいたことや考えたことを語り合いました。

みどりさん (保育士)
保育園に 5 年勤めたのち、
2022年 4 月にじいろ
おうちえんに入職

ゆうなさん (保育士)
幼稚園、保育園の勤務を経て、
2022年 4 月そらいろ
おうちえんに入職

ここなら自分のやりたいことが全部できる！

みどりさん　大きい園庭で、大きい年齢の子もいる保育園に勤めていましたが、いろんな保育園で働いてみたくて。おうちえんに決めたのは…フィーリング(笑)？

ゆうなさん　みどりさん、「ダイバーシティ工房はシェルターをやってたりして素敵」って言ってなかった？

みどりさん　大学のゼミで女性支援施設に興味を持ったんですけど、「保育士として働いてからでも遅くないよ」って言われて、保育園に就職したんです。当時は女性支援の仕事が気になってたけど、今はおうちえんが楽しすぎて、ずっとここにいたい(笑)。

ゆうなさん　私も学生時代は、子育て支援センターで働きたいと思ってました。保護者をサポートする仕事がしたくて。でも（みどりさんと同様に)、「保育士の経験を積んでから」とアドバイスされ、まず保育現場で働きました。前職は、慢性的に人手不足の大規模園。「この子は今、甘えたいんだな」とわかってても、置き去りにせざるを得ないのが苦しかった。転職しようと思って、障がい児保育に関わる仕事に決まりかけたとき、おうちえんの求人を見つけたんです。母体のダイバーシティ工房を調べたら、子育て支援も、障がい児支援（学習支援）も、保育園もやってる。「ここなら自分のやりたいことが全部できる！」と思って入職を決めました。

みどりさん　おうちえんは、いろんな人がいておもしろいよね。保育園って「保育ひとすじ」の人が多いけど、ここは子育てを経て保育士になったとか、社会人になってから保育士資格を取ったという人が多い。

ゆうなさん　「前職は営業でした」とか「事務やってました」とか「理学療法士です」とか。

みどりさん　いろんな考え方ややり方があるのが当たり前で、こどもへの視線も温かい。

「私はこう思う」と言える環境がある

ゆうなさん　私、こどもがこんなに手がかかるって知らなかったんです。前職で 1 歳児が 24 人いたときとは全然違って。こどもたちは我慢していたのかもしれないって、今は思います。おうちえんでこどもが 6 人になったとたん、「こどもって、こんなにわがままなの？」ってビックリした。でも、自分の気持ちや要求をそのまま出すのが本来の姿。それが自然にできるおうちえんは、「おうち」だなって思う。

みどりさん　よく「小規模保育園だから、こどもの発達が遅い」と言う人がいるけど、全然関係ない。逆に、小規模でこどもが少ないからこそ、丁寧に見てあげられる。今、2 歳の子たちがハサミ使ってるんだけど、2 歳にハサミなんて以前は無理だと思ってた。

ゆうなさん　一人ひとりを見る余裕がないと難しい。

みどりさん　だよね？でも、見られるから、やらせてあげられる。やらせてあげれば、できる。保育園の大小じゃなくて、保育士の「こどもを信じる力」と「環境」だと思う。

ゆうなさん　あと、「園庭がないから体力ないんじゃないか」って思ってたけど…。

みどりさん　思ってた！

ゆうなさん　園庭がないから、公園に行くんですよ。公園まで往復歩いて、1 時間半とか遊ぶから。あり得ない！

みどりさん　前職の保育園では、1、2 歳児はお散歩用のカートに乗ってたから、私、甘く見てた。あの子たち、めっちゃ歩いてめっちゃ体力ついてる(笑)。

みどりさん　スタッフ同士でも、何かあると「共有してみんなで考えよう」って話し合えるのがすごく楽しいし、ありがたい。

ゆうなさん　年齢や職歴にかかわらず、「私はこう思う」と言える環境がある。毎月 1 回ミーティング「だけ」の時間があるのも衝撃でした。ミーティングって、こどものお昼寝の横で、片手間にやるものだったから。

みどりさん　そもそも私たち若手が、「こんなことを話し合いたい」って言えること自体、すごいよね。おうちえんは、こどももスタッフも自分を出せる、自分らしくいられるところです。

スタジオplus+に通うきっかけは学習に困ったこと それがいつしか居場所の一つに

「スタジオplus+を卒業しようと思える頃には、他にも居場所ができていた」
高校に進学後、「もう大丈夫」とスタジオplus+を卒業していったはるやくん（仮名）とそのお母さまと、スタジオplus+に入ってから卒業するまでを振り返りました。

はるやくんのお母さん

―スタジオ plus+ に通い始めたとき、はるやくんやご家族にとってはどのような時期だったのでしょうか？

当時は小学校４年生。思い出すのは、家で算数の図形問題を一緒に解き「あー、こんなに伝えるの難しいのか」と思ったこと。家で勉強を見るのは難しいと感じました。友達と上手くいかず嫌な思いをして帰ってくることも。学校の他に素敵な場所があればと、子どもの特性が理解され、個別で学習をサポートしてくれるところを探しました。そこで出会ったのが立ち上げ当時のスタジオplus+瑞江教室でした。
「運命だ！」
色々探してやっと見つけたので、そう思いました。

―スタジオ plus+ に通い過ごす中で、どんなときにはるやくんの成長を感じましたか？

通い始めた頃は私が送り迎えをしていましたが、１人で通えるようになったとき、成長を感じました。
「もう１人で行ける？」「うん、大丈夫」と。
そして、気持ちや時間の切り替え。
学習の休憩中にタブレットのゲームで遊んでもまた学習に戻る様子を先生から聞いて、成長したなと。↗

中学時代はコロナ禍で、オンラインで利用を継続しました。先生と趣味や好きな漫画について楽しそうに話していて、学校とは違う自分を出せる場所なんだと思いました。
スタジオplus+は学習のサポートを求めて通い始めましたが、いつしか学習だけじゃなく、子どもにとっての居場所になっていたんです。学校でも気の合う友達を自分で作り、小学生のころとは違っていました。

―そうした中学時代を経て、はるやくんは高校生になりスタジオ plus+ を卒業しました。決断はどのようなものでしたか？

中学生になると自分で友人関係を築けるようになっていました。昔から続けた別の習い事も大事な存在で、スタジオplus+以外にも信頼できる居場所がありました。
「スタジオplus+はそろそろ卒業してみる？通いたくて待っている子に席を譲るのはどう？」私からそう聞くと、本人は結構あっさり、「うん、俺大丈夫そう」。
私も、信頼する支援場所から離れることに不安がないわけではありませんでした。でも、どんなにいい場所でもそこで働く人がずっといるわけではないし、困りごとや悩みの種類も成長とともに変わります。そう思っていた中で、高校生になり大丈夫だと思えたタイミングで安心して卒業を決めました。

はるやくん

―スタジオ plus+に通い、はるやくんにとってよかったと思うことはありますか？

学校の授業についていけるようになったことと、勉強を自分のペースでできたこと。学校だとペースが決まっているけど、ここは自分に合わせて進められることがよかったです。特に中学生からは勉強が難しくなったから。

―自分のことで「こんな風に変わったな」「できるようになったな」と思うことはありますか？

勉強では、暗記やマークシートの形式が得意で自分に合う方法だと気がつきました。特に暗記は朝早起きしてやるのがいいことを自分で見つけ、実践してました。
勉強以外だと、性格が外に開いて、ちょっと外向的になった。（スタジオ plus+ の）担当の先生が話をちゃんと聞いてくれていると感じて、そういう相手だと話したくなりました。
外向的になれたことは、就職試験の面接でも役立っているかな。友達とも前より話せるようになって、一緒に電車で出かけたりしています。

―スタジオ plus+ は はるやくんにとってどんな場所だったと思いますか？やめるときには不安は感じなかった？

学校とは別の「学び舎」かな。
スタジオ plus+ は僕にとってルーティンだったけど、後輩に引き継ぎたいし、やめても大丈夫かなと思った。
後輩たちには、ここでは先生たちが一人ひとりのペースに合わせてくれるから頑張ってください、という気持ちです。

＊本ページでは、グラフィックレコーディングによる挿絵を掲載しています。グラフィックレコーディングとは、議論や話の内容を文字とイラストでリアルタイムに可視化する手法のことで、今回はインタビュー中での印象的なシーンを抜粋して掲載しています。

学習支援で私たちは何を届けたいのか？

発達障害をはじめ学校生活に特別なニーズのある子どもたちに学習支援を行うスタジオplus+は、2022年に開室から10年を迎えました。ダイバーシティ工房の支援の一つの大きな軸としてあり続けてきた学習支援。支援を通して私たちが本当に届けたかったものは何だったのか？10年の年月を経た今、若手リーダーたちが改めて考えました。

支援者 A
スタジオplus+ 教室長。
ひらがな読み書き教室を立ち上げ時から担当。

支援者 B
スタジオplus+とひらがな読み書き教室で個別支援を担当。拠点全体の支援の質を上げる研修や支援員同士の相談会なども行う。

支援者 C
スタジオplus+とひらがな読み書き教室で個別支援を担当。新教室の開設を担当し、より多くの方に支援を届けられるよう活動中。

「ひらがな読み書き」という新しい分野の支援を届ける中で見えたこと

―学齢期の子どもを対象にしたスタジオplus+での学習支援に加え、2020年には、ひらがなの読み書きに特化した支援を行う教室を開設。ひらがなの読み書きに特化した新しい事業の中で生まれた気づきは？

B 当初ひらがな読み書き教室が想定していた対象は、読み書きの苦手さから勉強が大変になっている小学校3～4年生くらい。そうしたお子さんと繋がることができたのと同時に、最近は年長のお子さんの問い合わせや利用も増えていますよね。

A どの年齢のお子さんもそうですが、発達の段階やスピードは個々に違います。年長のお子さんを受け入れることで、「年長でできていないとまずいのでは」と、かえって保護者に不安を与えないか、支援の捉え方を考えた時期もありました。就学前だと読み書きを必要とする勉強は始まっておらず、保護者の方は不安だけれど子ども本人は困っていない場合もあります。でも実際に支援を始めると、学校に入ったら大変なこともあるだろうと思うお子さんたちと繋がっている実感がありました。
小学生以上のお子さんの中には、読み書きへの苦手意識から「文字を見ることすら嫌！」と強い拒否感を示す場合も。そこに至る前に、文字に親しみを持つ機会への介入やサポートが選択肢としてあってもいいのではと思うようになりました。

C ひらがな読み書きの支援に限らず学習支援を通して、子どもたちに「勉強ってそんなに嫌なものじゃない」と感じてもらうことは常に意識しています。
書くのも勉強も嫌だけど、「好きなアニメキャラクターの名前を漢字で書きたい！」と言う子がいたんです。学習ってそういう動機でいい。好きなことを調べるには読むことが必要。好きだから、知りたいから、それで身に着けた力がこの先やりたいことに繋がるかもしれないですよね。

A 支援を行う前の段階で、「ひらがなの読み書きが苦手」という状態自体への理解がまだ社会に十分に広がっていないことも感じました。教室の集客では、何をどんな言葉で伝えると不安や困りごとがあるお子さんや保護者に情報が届けられるのか、チームでそこから考えたことも、読み書き支援ならではの過程でした。

学習支援を通して本当にやりたいこと

―毎週学習支援の拠点に通ってくる子どもたちとの関わりを通して、最終的に作り出したい価値はどんなもの？

B 子どもたちが多様な価値観と触れあえる場でありたいなと思っています。学校では興味を共有できる相手がいなくても、ここに来ると大人や違う学年の子で話せる相手がいる。そんな経験ができる場所でありたいです。
子どもたちを見ていると、「いい子でいなきゃ」「頑張らなきゃ」とたくさん考えて生活してるんだろうなと感じることも。スタジオplus+での出会いを通して色々なあり方があっていいんだ、とも感じてもらえたら嬉しいです。

C 学習を通してポジティブな経験ができる場所でありたいですよね。自分の力で頑張れる難しすぎない内容に取り組み丸がもらえたり、ずっと勉強を求められるのではなく「休憩をしたい」という要求が受け入れられたり。
子どもが「自分のことが認められている」と感じられる経験こそが、スタジオplus+が届けたいものだと思います。

A 良いことや楽しかったことだけでなく、負の感情も含めてありのままの自分を受け止めてもらえること、寄り添ってくれる大人がいることは、子どもにとってすごく大事。スタジオplus+やダイバーシティ工房が、そういう価値を届ける場であり続けたいですね。

こんな支援者でありたい！
子どもや家庭だけが頑張るのではなく、彼らを取り巻く環境が良い方向に変わるようなアプローチをしたい。

支援で大事にしていること！
子ども・保護者・支援者の三角関係。保護者の方と情報共有をしあい、一緒に支援を進めています。

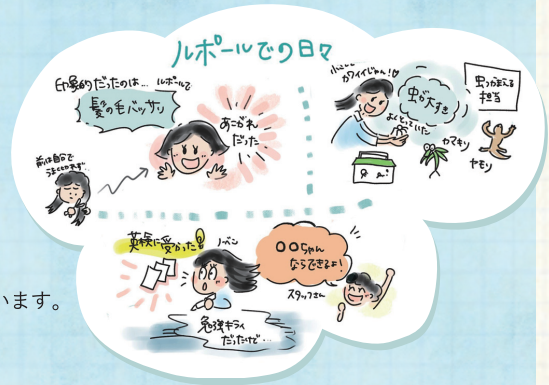
A B C

こんな教室を作りたい！
子どもと担当スタッフ間の信頼関係はもちろんのこと、子どもが教室全体に対して安心感を持てる場所。そんなことができるスタッフが育つ教室にもしたい。

ルポール退所後の生活

「私のおうち」を手に入れた一人暮らし

自立援助ホーム「ルポール」では、様々な事情から家庭で過ごせない
10代～20代前半の女性が、学業とアルバイトを両立しながら生活をしています。
ルポールを出て一人暮らしをはじめたある20代の女性に、
ルポールでの生活や今の生活について聞きました。



安心して過ごせたルポールの日々

ルポールはすぐに慣れて安心して暮らせた。
ルポールに来た当日、先に入居していた子が、
色々教えてくれたおかげ。
テレビでユーチューブをみられることとか、
ここに座っていいよーとか。
来たその日からソファで寝転がってリラックスしてた。

印象的だったのは、入ってすぐくらいに髪を短く切ったこと。
家にいたころも自分で鏡で見ながら
切ろうとしたりしたけど、すごく難しかった。
ずっと短くしたくて、ショートが憧れだった。

あと、英検に受かったこと。
勉強嫌いで全然勉強していなくて、もうダメだろう
と思ってたけど、朝出かける時に、スタッフさんが満面の笑顔で
「○○ちゃんならできるよ！」と言ってくれた。

虫が好きで、よく採って部屋で飼ったりしていた。
虫が好きな理由は小さくてかわいいから。
蛾とかも好き。ぽっちゃりしていて可愛くない？
ルポールでは虫を捕まえる担当だった。夜中とかに他の子が
部屋に来て、きゅうにトントントンってノックしてきて。
「洗面所の天井にでかいクモがいるー」って呼ばれて。
「しょうがないなー」って捕まえてあげてた。

ルポールの人たちは
みんなやさしい。
誰もどなって来ない。
ルポールは設備が
ハイテクなんだよね。
ドラム式洗濯機とか色々、
テレビで
オンライン動画がみられるし。
最初は分からなかったけど、
みんな全部教えてくれて使えるようになった。

たまにトラウマを思い出してしまって、
パニックになって壁を殴ったこともあった。
部屋のすみに行ったり、クローゼットに入ったりして、
気持ちを落ち着かせてた。

ルポールで一番頑張ったこと

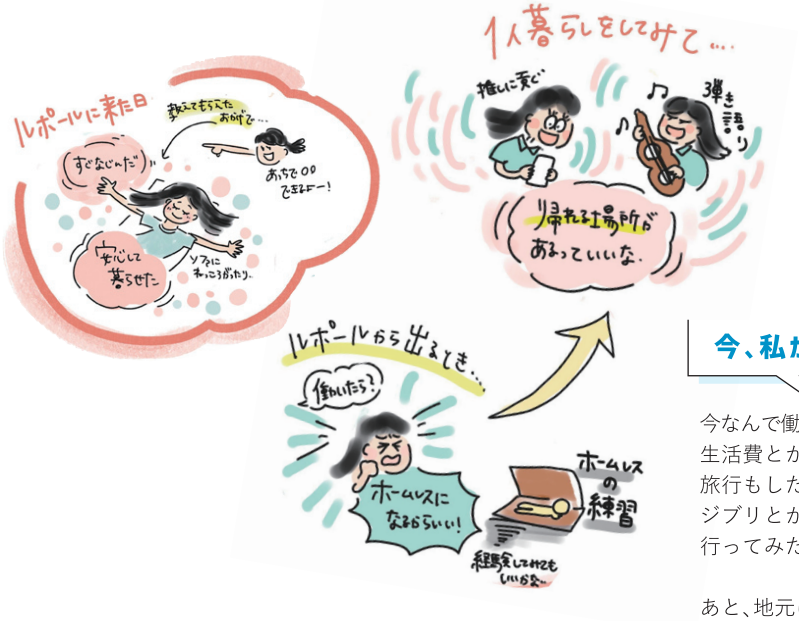
頑張ったことは、スマホを買うために
ファミレスで働いたこと！私はスマホを手に入れるために、
アルバイトをして清掃のお仕事も追加で掛け持ちした。

入居したときはまだ未成年で、携帯の契約が大変だった。
ルポールのルールでは、携帯は入居して自分で支払う。
そもそも私は、入居したときは携帯を持っていなかった。

私は携帯なくても生きていけると思った。
ルポールでは、パソコンも貸出してくれて、検索とか
SNSもできるし、めちゃくちゃ我慢しているって
わけではなかった。なんとも思わなかった。
働いて携帯を買う、という目標があるから、
それに向かって頑張れた。

清掃の仕事では、色んな場所に行って色んな経験をした。
現場は、休日の会社のオフィスが多かった。
コロナの時期、全身白い防護服を着て消毒の仕事もした。
防護服はすごく暑かった。感染が起きた場所だったみたい。

清掃のお仕事は、体力的にはきつかった。
当時はまだ未成年だったから、大変なことも多かったけど、
会社の人は、みんな結構かわいがってくれた。
お弁当を持って行かなくても、ご飯何食べる？
とか聞いておごってくれたりして。



帰れる自分の家があるのは良い

一人暮らしは、普通かな。今住んでいるところは、
私のおうち、という感じがしてきた。
部屋でギターの弾き語りをしたり好きなユーチューバーの
グッズを買って「推しに貢ぐ」のも楽しみ。

寂しいことは、ぬいぐるみ以外に喋り相手がいないこと。

ルポールだと、朝大人があいさつしてくれる。
一人暮らしだと、誰もあいさつしてくれないから。
アラームに起こされて、パッと目がさめて、仕事だ、
朝ごはん食べないと…という感じ。

でも、帰れる場所があるのは良いよね。
ホームレスの練習とかしてたけど。
普通にがんばって働いて
部屋を借りて住んだ今の方が良かった。

ホームレスの練習っていうのは、私、ルポールを出る前は
なかなか働こうとしていなくて。専門学校をやめて、
そろそろ働きなよ、と言われていたけれど。
「いや、私ホームレスになるからいいよ」って。
段ボールに試しに寝てみたり、
ホームレスの練習みたいなことをしてた。

ユーチューバーに影響されたところもあった。
面白いじゃないですか。人生一度きりだし。
ホームレスからでも
人生が変わることがあるかもしれないから。
ゼロからやってみるのはカッコいいよね。
心配してくれた大人もいたけど、
当時は放っておいてくれと思っていた。

今、私が働く理由

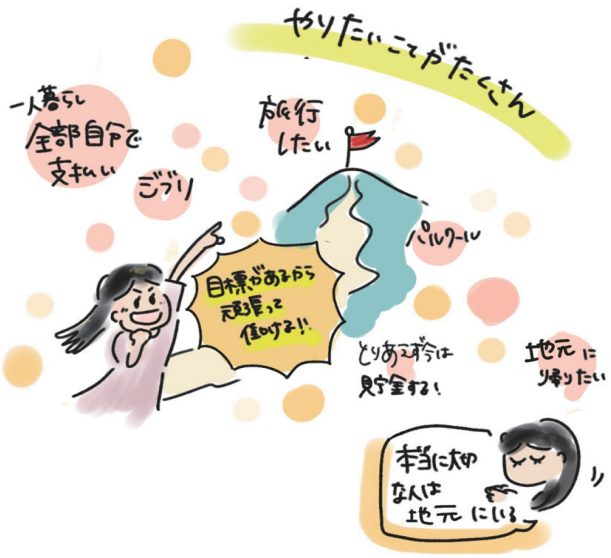
今なんで働いているかというと、一人暮らしをしているから。
生活費とか自分で払えるようにしたいし。
旅行もしたい。日本国内も回ったことないから。
ジブリとか新しい場所がたくさんできているから
行ってみたい。パルクールにも興味がある。

あと、地元に帰りたいというのもある。
おばあちゃんとか、会いたい家族がいるし、
幼馴染にも会いたい。本当に大切な人たちがいるから。

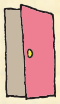
そう思って、がんばって仕事を探したら、
今の仕事を見つけられた。
今の仕事は内容も良い、人間関係も良い。
ここなら続けられそう、と思った。

今の仕事は子どもに関わる仕事。
体を動かせるし、運動不足にもならない。
私は「遊ぶ」っていうことが好きだから、
パルクールとかもそうだけど。

私は深い理由はないのよ。
今は仕事を頑張ってお金を貯めたい。



＊本ページでは、グラフィックレコーディングによる挿絵を掲載しています。グラフィックレコーディングとは、議論や話の内容を文字とイラストでリアルタイムに可視化する手法のことで、今回はインタビュー中での印象的なシーンを抜粋して掲載しています。



アウトリーチ座談会

10の拠点を持つ私たちが地域に出ていく理由

ダイバーシティ工房のアウトリーチ事業の始まり

佐藤　入職時にスタジオplus+の配属だったころは、すごくいい場所だと感じる一方で、放課後等デイサービスは利用を希望する方からの申し込みが来て初めて関係性が始まるものなので、必要なサポートを探すことすら難しいような子どもたちに繋がりたい、とも思いました。それなら会いに行った方が絶対にいい。
何らかの事情で自分に合った支援を受けられていない子って学校の中にたくさんいました。
「じゃあ彼ら・彼女らに会いに行こう」と行動していく中で、事業部に「アウトリーチ」という名前がついたのかなと思います。

―松村さんはアウトリーチ事業部が発足されてから入職しましたよね。

松村　前職では、相談窓口で勤務していましたが、窓口に来る頃には既に大変なことになっていて。もっと手前の段階で話が聞けていたら、早く支援に繋げられたんじゃないかなっていうもやもやを抱えながら仕事を探していました。
そんな時に、HPで「アウトリーチ事業部」というワードを目にして、まさしくこれがしたい！学校に出向いたり、地域の中に出かけて行ったりすることで、支援に繋がりにくい人たちに会いに行くのを仕事にできると感じて、工房に応募しました。

佐藤

宮坂

サポートできる拠点があるから、地域に出て行ける

松村　入った当初は、プラットでの支援員としての業務と地域に出ていく業務に、自分の中で繋がりを 見出せていなかった。でも、しだいにプラットでの活動があるからこそ、外部機関の方から信頼され、子どもたちを繋げてもらえているんだと感じるようになりました。拠点となる場所がなく外に出ていくだけの人だったら、学校で出会った子に何ができるのか、手詰まり感があるかもしれない。プラットの無料学習教室、スタジオplus+、自立援助ホーム…と自分たちにサポートできる拠点の引き出しがあるから、私って外に出て行けているんだなと最近思いましたね。

宮坂　公民館など公共の施設や他の場所を借りる形ではなく、プラットのように自分たちで拠点を持って、営業許可をとって子ども食堂や学習支援をやっているところってなかなかないんですよね。その点はプラットの強みで、興味を持ってもらったり、頼ってもらえる理由になっているかなと思います。実際に子ども食堂を立ち上げたいと思って問い合わせてくださって、見学に来た方が、今では、子ども食堂のネットワークにも入られたとのことでした。こういった形で、地域の居場所づくりに貢献できるのはうれしいです。

福祉の垣根、相談することのハードルを低くしたい

―アウトリーチの活動を通してどんな地域を作りたいですか？

松村　福祉の垣根を低くしたいですね。相談することのハードルも低くしたいです。福祉の窓口に行くことは、地域の人にとって緊張やストレス、周りの人からどう見られるかといった不安感が伴うと思うんです。
私たちが地域に出向いていったり、私たちだけでなく地域で活動する多様な人が少しずつ手を伸ばすことで、「しんどい」というのを、もうちょっと早い段階で言えるんじゃないかなと。そうなっていけばいいなと私は思っています。

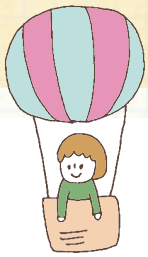
宮坂　福祉の垣根を低くするって言うのは本当にそう。深刻に困る前に繋がれるといいですよね。本当に困ってから探すって難しい。それは別にダイバーシティ工房じゃなくてもいいんですけど。ちょっと大変だなと思ったときに、声をあげられる場所が地域にたくさんあったらなと思います。

（写真左から）

松村ひかり
2022年ダイバーシティ工房入職。
社会福祉協議会で主に高齢者支援の相談窓口で勤務ののち、児童館勤務。
漫画・アニメ、本を読むことが好きで、日々子どもたちとも熱く語り合っています。

宮坂奏子
2019年ダイバーシティ工房入職。
高齢者の入居施設で介護職員を経験。
早寝早起きが苦手。子どもに私の起床時間を話すと、みんな安心してくれます。

佐藤佑紀
アウトリーチ事業部マネージャー。2020年ダイバーシティ工房入職。
元公立中学校の社会科教員。
サッカーと音楽、歴史が好き。よくあちこちに体をぶつけています。



出会った子どもたちとの私たちの関係性

―出会った子どもたちについて、印象的なエピソードはありますか？

佐藤　校内居場所カフェ（※）にいる子たちですかね。最初は子どもたちに「これとかやってみたらどう？」と声をかけると、「こんなんできるわけねえじゃん」と返事が返ってきたり、とげとげしい言動がありました。自信のなさとか、自分で自分を責めるような気持ちを感じました。

松村　大人に対する敵意とまでは言わないけど…フード被ってましたね。視線を避けていたんではなかろうかって感じました。最近は全然被らなくなりました。

佐藤　わざと悪ぶって声をかけてくる子もいましたね。大人をドキッとさせるようなことを言って、試そうとしたんですよね。でも今そういうことはもう言わないですよね？

松村　言わない！今では後輩を連れてきてくれますからね。1年前と比べても全然姿が違うし、バンドをやることで自分を発揮している姿を見ると、私たち大人がいる場でも自己表現してもいい、居場所カフェには一緒に楽しみどんな姿も受け止めてくれる人がいる、と感じてもらえていることが伝わってきます。関わり始めたときと比べると「関係性が変わったな」とすごく思います。私たちに対しても明るくしゃべることや開示してくれることが増えたな。

松村

※校内居場所カフェとは？

高校の放課後に空き教室などを利用して飲食やゲームなどをしながら、高校生が校外の大人と話をしたり、交流ができる空間です。

「対話する」文化をこれからも

ダイバーシティ工房は、2022年で法人設立から10年を迎え、次の10年に向けて歩み始めました。

5事業部10拠点で働くダイバーシティ工房のスタッフは、130名を超えました。
沖縄在住の代表、フルリモートで働くスタッフ、SNS相談のように基本的な対応がオンラインとなる活動など、事業やスタッフ数の拡大と合わせて私たちの働き方も多様になりました。

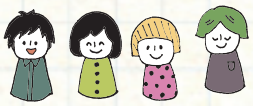
多様な人、働き方のもとでも同じビジョンを描き、今後もだれもが暮らしやすい社会を作っていくために、2022年度はダイバーシティ工房が創業期から大切にしてきた「対話する」文化の再醸成に取り組みました。今回の冊子の表紙に選んだのも、私たちが対話の場として大切にしている合宿での一コマです。

「組織づくり」を改めて行っていく中では、
新たにシステムコーチング®という手法を取り入れ、
年間を通して対話する関係性の構築にも取り組みました。

ダイバーシティ工房が
取り組む組織づくりは、
こちらから記事を
お読みいただけます！

私たちは、どんな社会や地域で暮らしたいだろうか？
今後は団体内部にとどまらず
対話する関係性をより広く、多くの人たちと共有しながら、
「全ての家庭が安心して暮らせる社会」を目指し活動していきます。

サポーターの声



ダイバーシティ工房との出会いは 2016 年、当時、公立中学校の教員をしていた私は、疲弊していました。そんなとき、偶然にも幼少の頃住んでいた市川市、駅前のビルで、笑顔で迎えていただいたのがきっかけでした。当時のスタッフの皆さんの温かい笑顔、価値観「クレド」に触れ、多様性を大切にする理念に共感しました。
代表不破さんの「工房立ち上げの思い」に強く感銘を受け、その後マンスリーサポーターとして応援してきました。自立に向けた生活支援、貧困家庭への支援など、現在の日本社会の問題に正面から関わり、常に挑戦し続ける活動を本当に素晴らしいと感じてきました。私自身は現在、大学現場で障害のある学生への支援を行っており、ダイバーシティ工房さんの活動との共通性を強く感じています。スタッフの皆さんとの出会いに感謝しています。これからも応援し続けます。

マンスリーサポーター　八木悟さん

私は子どもが好きなので子どもに関わるボランティアを探していました。子ども食堂のような活動にも関心があったので 4 年前から週に 1 回、プラットで開催する食事つき無料学習教室にご飯を作りに行っています。子どもたちにおいしくて元気になるご飯をたくさん食べてほしいなと思っています。
野菜をなるべくたくさん入れて健康的なご飯。見た目も彩りよく美味しそうにみえるご飯。一緒に食べるスタッフやお友だちと会話が生まれるメニュー。そんなご飯をこれからも作れたらいいなと思っています。寄付で旬のお野菜を届けてくれるご近所さん、献立を毎週考えてくれる相方のボランティアの協力があって実現できることです。

食事つき無料学習教室　　調理スタッフ　岡野加恵さん

私がボランティアや海外の子どもへの支援を始めたのは今までの人生の中で精神的にも経済的にも一番大変な時期でした。でも自分よりもっと若くして苦労をしている子どもたちがいるのだと知り、関わることで私自身が現実に負けず生きる力を得たように思います。その恩返しもあるのかもしれません。
私が支援できるのもスタッフの皆さんのお力があってのことです。敬意と感謝をいつも忘れずにおります。心からありがとうございます。

マンスリーサポーター　Y.O. さん

ダイバーシティ工房と一緒に、子どもや家庭が暮らしやすい地域づくりを目指していきませんか？

マンスリーサポーターとして、一緒に地域の子どもたちを
支えていただける方を募集しています！
無料学習教室や LINE 相談事業、食料支援など、
ダイバーシティ工房が行う各種事業が今後も継続的に行われるよう、
ぜひ応援をよろしくお願いいたします。

※市川市にお住まいの方は税額控除が受けられます。

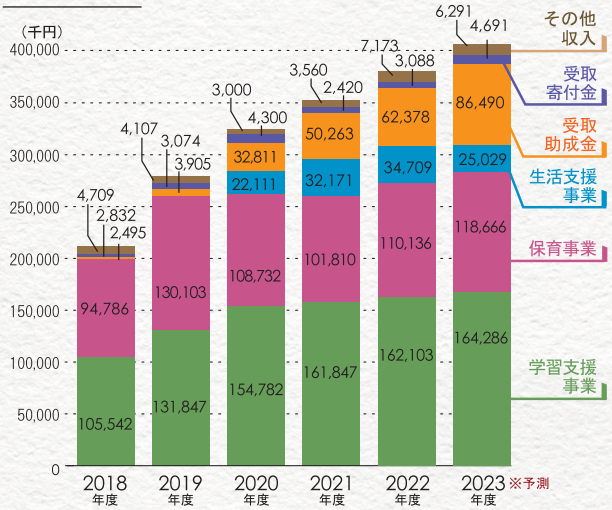
お問合せ先：support@diversitykobo.org

詳細はこちらから
ご覧ください

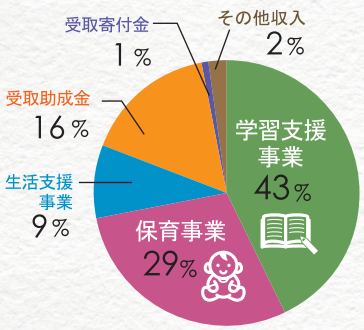
2022年度 会計報告

コロナ禍3年目での事業運営となりましたが、放課後等デイサービス・保育園・自立援助ホームとも安定した運営を行うことができ、全体として増収となりました。また、昨年度よりも多くの助成金に採択いただき、ひらがなの読み書きに関するオンラインイベントを開催したほか、全国各地の支援者・支援団体への訪問を通じて、ステークホルダーとの繋がりを強化できた年でした。2023年度は生活支援事業部にてグループホーム、制度外事業として住まいのサポートが必要な母子向けのシェアハウスの開設を予定しているほか、千葉県からヤングケアラー支援事業を受託しました。新たな事業づくりとネットワーキングの両輪を安定して実行できる組織基盤を作るため、2023年もファンドレイズ活動に注力していきます。

収入推移



2022年度収入比率



※活動計算書・貸借対照表・財産目録を含む決算報告書はダイバーシティ工房HPでご覧いただけます。

助成団体（五十音順　敬称略）

- 赤い羽根共同募金　新型コロナ感染下の福祉活動全国キャンペーン　居場所を失った人への緊急活動応援助成
- 一般社団法人全国古民家再生協会・特定非営利活動法人全国ひとり親居住支援機構
- 公益財団法人　小林製薬青い鳥財団
- 厚労省新型コロナウィルス感染症に対応した自殺防止対策事業
- ゴールドマン・サックス地域協働型子ども包括支援基金　地域協働型子ども包括支援構築・組織基盤強化
- 人生100年時代を支える住まい環境整備モデル事業
- 大和証券グループ未来応援ボンド子ども支援団体サステナブル基金
- 認定特定非営利活動法人育て上げネット×READYFOR株式会社　休眠預金　長期化する若者の「コロナ失職」包括支援
- 認定特定非営利活動法人日本NPOセンター　タケダ・女性のライフサポート助成プログラム

企業寄付・個人寄付　●有限会社新屋様　●鈴木徹様　　マンスリーサポーター　42名（2023年4月時点）

特定非営利活動法人
ダイバーシティ工房

すべての家庭が
安心して暮らせる社会へ

設　　立　1976年（NPO法人化2012年）　代表　不破牧子
職 員 数　136名（2023年4月現在／インターン・ボランティア含む）
Webサイト　https://www.diversitykobo.org
Facebook　https://www.facebook.com/diversity.cobo
所 在 地　〒272-0034　千葉県市川市市川1-9-1 AKIOビル4階
☎047-711-1136／info@diversitykobo.org

運営施設一覧

地域の学び舎プラット・自在塾　千葉県市川市平田 2-8-1 ☎047-718-2330／スタジオ plus+ 市川駅前教室　千葉県市川市市川 1-11-8 ルミノッソ市川 4 階 ☎047-316-0569／スタジオ plus+ 市川中央教室 千葉県市川市市川 1-9-1 AKIO ビル 4 階 ☎047-711-1139／スタジオ plus+ 本八幡教室　千葉県市川市八幡 3-8-19 第 9 モリビル 3 階 ☎047-316-1366 ／スタジオ plus+ 瑞江教室　東京都江戸川区東瑞江 3-41-6 UHR ビル 201 号 ☎03-6638-8136／スタジオ plus+ 船橋教室 千葉県船橋市宮本 1-21-8 ウィン船橋 103・104号室☎047-411-7798 ／スタジオ plus+ 西船橋教室　千葉県船橋市葛飾町 2-383-1 バリアント G 105 号室☎047-401-0979 ／にじいろおうちえん 千葉県市川市市川1-12-23 メゾンドロワール202号室 ☎047-712-5022 ／そらいろおうちえん　千葉県市川市市川 1-12-23 メゾンドロワール 101号室 ☎047-712-5022 ／自立援助ホーム Le Port 千葉県市川市（住所非公開）／ LINE 相談むすびめ　オンライン

読者アンケートのお願い

ダイバーシティ工房の年次報告書をご覧いただき、
ありがとうございました！

次回からの作成や今後のイベント等にも活用させて
いただきたく、ぜひ感想をお聞かせください。

3分ほどのアンケートとなります。
ぜひ、お待ちしております！

アンケートに回答する

特定非営利活動法人
ダイバーシティ工房